

REPORT 2021

地域連携教育推進室



SHIGA UNIVERSITY

2021, 芽吹く



contents

- 1.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P3
 - ・地域連携教育推進室の運営体制
- 2.地域連携教育推進室の紹介・・・・・・・・ P5
- 3.プロジェクト科目
 - ・社会人基礎力向上プロジェクト2021春・・・・・・・・ P7
 - PBL基礎「聞く・考える・伝える」スキルとマインド
 - ・SDGsプロジェクト2021春・秋・・・・・・・・ P8
 - 春「持続可能性×私」でマルシェを企画しよう
 - 秋「マルシェ企画—持続可能な社会づくりをテーマに」
 - ・SDGsプロジェクト2021春・・・・・・・・ P9
 - 「シェアについて探求する」
 - ・PBL型インターンシップ2021夏・・・・・・・・ P10
 - 企業へSDGs活動を提案しよう
 - ・社会人基礎力向上プロジェクト2021秋・・・・・・・・ P11
 - 「対人援助のプロから学ぶコミュニケーション・ファシリテーション・課題解決のスキル」
 - ・よのなか探求プロジェクト2021年秋・・・・・・・・ P12
 - 「私たちが政治の関わりを考える」
 - 議員への取材とワークショップの実践を通じて
 - ・企業連携プロジェクト2021秋・・・・・・・・ P13
 - 「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」
 - ・不登校プロジェクト2021春・秋・・・・・・・・ P15
 - 春 多様な学びのあり方を学び、居場所づくりを考えよう
 - 秋 教育の多様性を学び、議論しよう
 - ・認知症プロジェクト2021秋・・・・・・・・ P16
 - 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト
- 4.イベント
 - ・サステナウィーク2021・・・・・・・・ P17
 - ・People's Pantry・・・・・・・・ P21
- 5.学生の自主活動・・・・・・・・ P23
 - ・学生の取組新聞掲載
- 6.協力企業・団体の皆様・・・・・・・・ P25



1 はじめに

IoT (Internet of Things) やAI (Artificial Intelligence) の発達にともない、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させ、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society 5.0）の実現が求められています。

滋賀大学でも2017年に日本初のデータサイエンス学部が設置され、文理融合の教育が推進強化されることになりました。地域連携教育推進室では、学生と地域（フィジカルな現実空間）をつなぐことによって、その基盤を提供しています。具体的には、経済学部やデータサイエンス学部で提供されているサイエンス、技術、エンジニアリング、数学（STEM）の授業に加えて、PBL（ProjectあるいはPlace Based Learningと呼ばれる）型授業、インターンシップ、ボランティア体験のほか、インフォグラフィックスや映像表現などの芸術（Art）的要素なども学ぶことで、文理融合型のSTEAM教育の完成を目指しています。

そもそも地域連携教育推進室の教育の源流は、2008年に始まったサービス・イノベーション人材育成支援事業（以下、SI事業）にあります。この事業の題目は「公共的な対話と知的共同作業をベースにイノベティブな『心の習慣』と「イノベーション評価能力」を養成し、地域の競争力の強化にコミットメントする中核的人材育成事業」と極めて長いものですが、改めてこの題目を眺めると、現在の地域連携教育推進室の姿と重なるものがあります。日常的に学生が集い、地域の課題などについて対話を重ねながら、地域に出ていく姿はまさにこの長いタイトルそのもののなのです。

映像制作を教育ツールとして活用しはじめたのもこのSI事業でした。当時はまだ「経済学部なのになぜ映像制作なのか」という疑問の声もありましたが、取材・構成・編集という連の作業の中で、課題発見能力、課題解決能力、プレゼンテーション能力といった社会人基礎力の中核となる力をつけるのに有効でした。

2010年には就業力育成支援事業が始まりました。大学の取り組みは「複眼的フィードバックによる就業力育成」と題されました。PBL型授業や映像制作などの取り組みを継続しながら、学生自身が、自分自身や企業（職業）を複眼的に眺めることによって、客観的かつ主体的な分析を行えるようにするために、学生自らが企業研究を行い、面接官として質問事項などを考え、実際に面接をおこなう「複眼的模擬面接」なども実施しました。

2012年からは、文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業【テーマA】（2012-2014年）」の助成を受けて、滋賀・京都・奈良の16大学の連携事業（「滋賀・京都・奈良を中心とした地域社会の発展を担う人材育成」事業）に発展をしました。この取組では、地元企業、経済団体、地域の団体や自治体等と産学協働連携協議会を設置して、そのもとにインターンシップ、PBL、キャリア形成、産業界連携という4つのテーマ部会を設けて、産業界（社会）のニーズに対応し、社会的・職業的にも自立した人材の育成に向けた教育の充実を図りました。さらに2014年からは、11大学と連携をして、文部科学省「インターンシップ等の取組拡大【テーマB】（2014-2015年）」の助成を受けて、更なるインターンシップの質的・量的拡大に取り組んできました。

地域連携教育推進室は、いわゆる就職活動が解禁になった際に行われる従来型の就職支援ではなく、1年生～2年生の早い時期から卒業にいたるまで継続的に「社会人基礎力」の育成をはかり、その発展としてアントレプレナーシップの体得を目的としています。本室のプログラムは、大きく3つに分けることができます。

① PBL（Project Based Learning）科目
地域社会やNPOを含む企業が実際に直面している課題を学生と共有し、地域社会や企業が学生が共同で解決していく活動を通じて、社会人基礎力やアントレプレナーシップを育成する科目です。

② プロジェクト型インターンシップ
地域連携教育推進室では、企業等の課題解決やプロジェクトに中長期間にわたり取り組む、プロジェクト型インターンシッププログラムを提供しています。SDGsや企業経営をテーマに座学で得た知識を深めます。

③ ボランティアプログラム
本学の学生たちが主体となって、地域社会や企業の課題を発見し、地域の方々と一緒に課題の解決を図っています。このプログラムは単位もなく、また就職に直結する活動ではありません。学生の自主性を最も養うものです。

本学では、以上の系統に沿った様々なプログラムを地域の自治体や企業、NPOと広く連携し、開発することで学生の「社会人基礎力」の育成とアントレプレナーシップの体得に取り組んでいます。

学生の「社会人基礎力」を育成していくためには、従来型の大学での講義はもちろん大切ですが、地域連携教育推進室を中心とした実践型・問題解決型で、地域社会に開かれた教育プログラムも大切なのです。

一方、一昨年から続く新型コロナウイルスは、地域に開かれた教育プログラムを行う上で大きな課題となりました。授業はオンラインが中心となり、またボランティアも、所属する部活動やサークル活動なども一時的に停止されたため、大学生らは個として生活し、行動せざるを得ませんでした。

しかしながら、そんな閉塞感が漂う大学環境の中で、今年度になって新たな活動の萌芽が見られました。学生たちは既存の団体にとらわれず、新たに集い、行動を始めたのです。例えば、環境活動を子どもたちに啓発する学生、食品ロス削減にフリーフードを提供する学生、地場産業の海外向けPRをする学生、投票率向上に取り組む学生など、あらかじめ大学や教員が引いたルールを歩くのではなく、自分たちで軌道を作っていく学生たち、他にもキャンパスの内外で学生の主体的な姿が見られました。まさにこれまでのPBL科目やボランティアプログラムでねらいとしていた社会人基礎力やアントレプレナーシップが発揮され始めてきたのです。

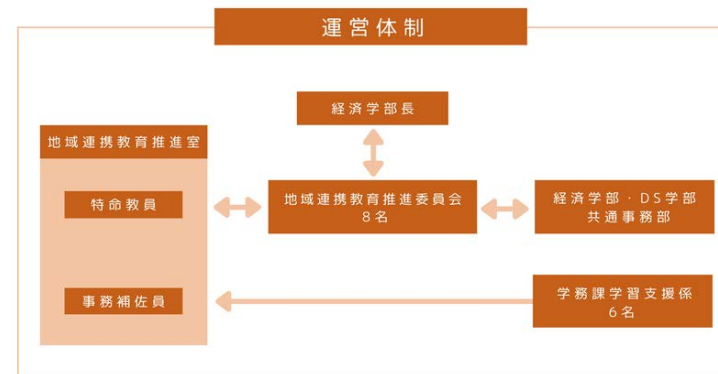
新型コロナウイルスの収束にはもう少し時間がかかるかもしれませんが、このような社会状況だからこそ、私たち地域連携教育推進室は、地域の企業・団体・住民の力をお借りしながら、学生ひとりひとりと顔の見える関係を形成し、彼らの芽吹きを促し、後押ししていきたいと考えているのです。

（地域連携教育推進室長）

地域連携教育推進室の運営体制

今年度の地域連携教育推進室は、特命教員と事務補佐員の体制で日常業務にあたりました。年度計画の策定や進捗管理については、地域連携教育推進委員会において適宜協議しながら、事業の執行を行っています。

2019年4月には、社会と大学との新しい関係を構築、深化させ、産学公連携を更に積極的に推進するべく、全学組織として「産学公連携推進機構」が新たに設置されました。地域連携教育推進室も、この新たな機構との連携・協力も進めています。



2 地域連携教育推進室の紹介

地域連携教育推進室は彦根キャンパスの校舎棟3Fにあり、学習スペースや図書の貸出、People's Pantry・みんなの食品庫などを行っています。授業の合間に立ち寄れる空間なので、学生同士の交流も生まれています。

この推進室には担当の教員とスタッフがいて、地域と連携する教育プログラムを行っています。例えば、企業や行政の方々と地域課題の解決に取り組むプロジェクト科目の提供やインターンシップ、ボランティアなど様々な機会を提供しています。



スタッフ紹介

柴田 雅美 室長／教育・学生支援機構 特命教授

この部屋に、さまよひに来てください。そして、偶然的な出会いを楽しんでください。
彦根歴45年。彦根のことで困ったらなんでも相談にのります。子ども食堂や学習支援をしているNPO 法人代表理事でもあります。
地域活動・ボランティア活動の紹介もします。

土田 梨絵（事務補佐員）

私は月～金曜日まで地域連携教育推進室のお部屋にいます！学生のみなさんとお話したり、相談ののったりと日々の繋がりを大切にしています。図書貸出や現在開催しているフードパントリーの受付もしていますので分からないことがあれば何でも聞いてくださいね。いつでもお待ちしております。

地域連携教育推進委員会

竹中 厚雄 准教授／地域連携教育推進委員長

菊地 利奈 教授

佐野 洋史 教授

田村 あずみ 国際交流機構 特任講師

入江 直樹 教育・学生支援機構 特命教授



©Shiga Univ.



書籍貸出事業

地域連携教育推進室内に、大学図書館とは別の独自の図書室を開設し、貸出も行っています。教員の選書や学生のリクエストなどをもとに、自己啓発や生き方をテーマにしたものから企業経営に関わるものまで幅広いテーマを扱っています。考え、行動するためにも、多くのインプットをしてください。

時間：9:30～12:00, 13:00～16:30（平日） 貸出期間：1人1冊 2週間以内

People's Pantry 事業

地域連携教育推進室には、People's Pantry・みんなの食品庫を設置しています。教職員や地元のフードバンクや農家からいただいた食品や野菜などを学生に配布しています。時間：9:30～12:00, 13:00～16:30（平日）

相談事業

リラックスした雰囲気のある地域連携教育推進室では、教員や職員との距離が近いことから、学生の日常生活や学業に関する相談にも対応しています。People's Pantry・みんなの食品庫を定期的に利用する学生にも積極的に声がけを行い、学生ニーズの掘り起こしから相談に繋げることも多いです。

情報発信事業

学生へのタイムリーな情報伝達として公式LINEやFacebookなどのSNSを使った情報発信に取り組んでいます。現在、公式LINEの登録者は276名です。プロジェクト科目などの案内やPeople's Pantry・みんなの食品庫の食品の入荷状況、地域のボランティアやイベントなどの情報を定期的に発信しています。



3 プロジェクト科目

社会人基礎力向上プロジェクト2021春

PBL基礎「聞く・考える・伝える」スキルとマインド

期 間：2021/4/14～7/21

履修者数：7名

担当教員：柴田 雅美

反復練習でスキルアップ！

本プロジェクト科目は地域実践型PBL学習を実践するために必要な基礎スキルの体得とマインドの育成を目指して開講し、経済学部生7名の履修がありました。

PBLの実践では、学内外で多くの人と出会い、良好な関係性を築くことが最初の入り口です。その基礎的スキルとして「聞く・考える・伝える」の切り口でスキルアップをはかりました。

授業の前半は、聞く態度・質問の手法など情報のインプット（聞くスキル）、その情報を組み合わせ（考えるスキル）で、端的にアウトプットする（伝えるスキル）知識を理解実践をしました。授業の後半では、スキルを実際を使って学生相互のインタビュー取材を行い、記事として作成し、プレゼンテーションとフィードバックを行いました。

今回のカリキュラムでは、教員や学生同士のフィードバックを受けながら何度も実践し、反復練習することに大きな意味がありました。「聞く・考える・伝える」の全てにおいて、個人のクセがあります。他者からの聞く直接的なフィードバックと、他者の姿を見ることで得られる間接的なフィードバックで、自分のクセに気づき修正をしていくことができました。



来季に向けて

授業を通じて、彼ら自身の「聞く・考える・伝える」のスキルアップがはかれたようです。初年時点で履修した学生が多く、今後の大学での学びや学生生活に活かされることを期待しています。



プロジェクト科目は、経済学部・データサイエンス学部の正課の授業プログラムの一つで、学科や学年を超えて、少人数で協力しながら、専門分野のスキルアップや地域課題の課題など特定のテーマに取り組むものです。自ら考え行動できる力などのアントレプレナーシップの涵養も目指します。

SDGsプロジェクト2021春・秋

春「持続可能性×私」でマルシェを企画しよう

秋「マルシェ企画—持続可能な社会づくりをテーマに—」

期 間：春2021/4/15～7/22 秋2021/10/14～12/2

履修者数：春12名・秋5名

担当教員：柴田 雅美

学生目線で語るSDGsとは

春学期の授業の一つ、SDGsプロジェクト「持続可能性×私」でマルシェを企画しよう」では、授業の成果発表として、去る7月8日（木）に滋賀大サステナマルシェを開催しました。学生らは授業でSDGsについて学んだ後、学生自身の社会への課題意識をベースに社会課題を紹介したり、持続可能にするために啓発したりするプログラムを作りました。

今回実施したプログラムは次の4つです。



「もったいないパントリー」

食品ロスの削減に関心のある学生が企画し、学生たち78名が食材提供を受けました。今回の食材調達には、彦根市社会福祉協議会さんのサポートで市内フードバンクから食材の調達を受けたり、近隣の農家さんから規格外野菜を、市内食品製造業さんから流通しない食品の提供を受けました。調達先を開拓するなどして関係を深め、今後も食品ロス削減の活動として継続が見込まれるものになりました。



「代替食 in 映画館」

この学生企画は、CO2が引き起こす地球温暖化の影響を映画を通して理解するとともに、CO2削減への取り組みの一つとして代替食（特に昆虫食）の可能性を提示し、実際に昆虫食を試食してもらうという企画でした。44名の参加者はコオロギせんべい、幼虫などを乾燥させたものを味わいました。参加者からは「形がわからないコオロギせんべいは、えびせんのようにおいしかった」などの感想がありました。



「ジェンダーカフェ」

性教育やLGBTQをテーマにしたブックフェアを行った、コンドームの使い方講座やサンプル配布を行いました。使い方講座には33人の参加があり、この担当学生が実物のコンドームを指にはめての実演と体験を行いました。企画した学生らは「コンドーム」という言葉を口にしたり、触ることが何かに恥ずかしい、という感覚を小さく、そして無くしていくことが大事で、必要とされる性教育なんですと語ってくれました。



「もったいないスムージー」

規格外野菜の活用を企画。きゅうりやラディッシュに、バナナやきな粉などを入れたスムージーを提供し、104名の学生らが試飲しました。学生自ら近隣農家さんに出向き野菜を調達しました。種類も量も毎日に異なる規格外野菜をどう活用すれば良いのかを考え、健康食として人気があり、家庭でも簡単に作ることができるスムージーを提案しました。



来季に向けて

今後は、様々な持続可能性をテーマに講演会や展示を行う「サステナウィーク」（11月末開催予定）なども予定し、滋賀大学キャンパスSDGsの実践と発信に取り組んでいきます。

サステナマルシェ秋はイベントページの

サステナウィーク2021にて掲載しています。→ P.20

SDGsプロジェクト2021春 「シェアについて探求する」

期 間：2021/4/20～6/15
履修者数：8名
担当教員：柴田 雅美

持続可能性へのキーワードは 身近な人との「おたがいさん」



この授業は、SDGs・サステナビリティ教育の一環として、学生が「持続可能性と私」を考える機会として行いました。「シェアすること」とはどんなことで、そのことによって何が生まれるかを体験することをねらいとしました。

「シェア」という言葉自体は、SNSなどで投稿を「シェア」という使い方、経済面では「シェアリングエコノミー」として、モノ、空間、時間や技術などをシェアすることでお金の循環を生み出す仕組みとして使われています。しかし、この授業では、シェアリングエコノミーについて紹介しながらも、お金を介さないシェアや、お金以外の価値をやりとりするシェアに着目し、それらにはどんな形態があるのかを学び、実際にお金以外の価値のやりとりを体験してみました。

具体的には、「講」や「無尽」といった、日本に古くからあった相互扶助的な金融方式について話題にしたり、相互扶助や相互依存な関係を体験するギフトサークルのワークショップも実践して、お金以外の価値の交換も経験しました。このワークショップは、参加者同士で今必要としているモノやコトを全員が話し、次に自分が提供できそうなスキルなどを発表します。そうすることでギフトサークルの中でニーズとサポートのマッチングが行われる、というものです。実際のワークでは卵料理の作り方やおしやれの仕方などを教えてほしいというニーズがあり、その知識を持つ学生が具体的なノウハウやYouTube サイトなどを紹介しました。このギフトサークルワークショップを毎週の授業で繰り返すことで、自分は役に立っているという感覚が生まれ、そして身近な人に頼るという相互扶助的な関係性を体感することができました。

さらに、SDGsの視点からは学生のニーズを受けて、エンカールコンシェルジュの風かおるさんを講師に迎え持続可能性やエンカールの考え方を学びました。



来季に向けて

ギフトサークルのワークショップで、自分のニーズが満たされ、また自分が誰かのニーズを満たしてお礼を言われるという他者との関わり方は、学生にはとても新鮮だったと感想をもらいました。デジタルツールでの関係性に慣れた若者にとって、リアルな相互扶助的な対人関係は少なくなっているのだらうと思います。お金以外の価値や「相互に」という感覚、いわゆる「おたがいさん」の感覚、今の時代だからこそあえて意識的に取り入れていきたいと考えています。

PBL型インターンシップ2021夏 企業へSDGs活動を提案しよう

期 間：2021/6/22～2021/10/12
履修者数：21名
担当教員：柴田 雅美



企業人と過ごした夏休み 経験から学ぶSDGs

本学地域連携教育推進室では、地域実践型授業プログラムとしてPBL型インターンシップを実施しています。地元企業や団体のプロジェクトをテーマに課題解決や企画提案を実践するプログラムです。プロジェクトを通じて、企業や経営者の魅力が大学生に届き、大学生は経営者の理念・哲学を学び、チャレンジ精神を育む取り組みとなることを目指しています。今年度は、彦根商工会議所青年部（彦根YEG）主催のプロジェクト型インターンシップ「Hikone Work Academy」に参画し、学生が彦根市内企業のSDGs活動を取材しました。本学からは「PBL型インターンシップ2021夏一企業へSDGs活動を提案しよう」として21名が企業に出向き、業務体験やSDGsに関する取材活動を行いました。

まずは、SDGsについて合同勉強会でレクチャーを受け、続いて、事前オリエンテーション・取材講座で現役新聞記者から取材のテクニックを学び、滋賀県版SDGsボードゲームでSDGsの事例を楽しみながら学習しました。

その後、1社につき1人の学生が職場を訪問し、インタビューや就業体験を通して各企業の魅力を取材しました。職場訪問や取材を通じ、地元企業や地域社会が抱える問題に対し、企業が取り組めるSDGsについて様々な角度から提案できることを目標としました。



企業訪問後はそれぞれの取材内容を持ち寄り、記事の書き方について再度講義を受け、参加者同士で取材内容のシェアを行い、交流を深めました。

成果報告会をオンラインで開催し、参加学生の各大学やバビシティ彦根（彦根市竹ヶ鼻町43-1）で学生自ら制作した取材記事のポスター展示を行いました。また、11月21日（日）に滋賀県立大学で行われたキャンパスSDGsびわこ大会で、取り組みの発表も行いました。

参加した経済学部の片山みずほさんは「このインターンシップで、彦根の企業が“2030年に向けて彦根をよりよい街にするために何をやるか”というように、SDGsを身近なところへ落とし込んで、積極的に取り組んでいることを知った。彦根には素敵な企業がたくさんあったし、そんな彦根の未来に期待も感じた」と冊子の中で語っています。

来季に向けて

コロナ禍で学生同士の交流が減るなかで、オンラインであってもディスカッションや交流を希望する声が多かったこの一年。オンラインの普及で他人との関わり方もますます合理化・効率化されるシーンも多くなってきました。そんな時代だからこそ、21年度は多様な関わり方のベースを作るプログラムとして、コマ数と履修人数も増やして行っていきます。



社会人基礎力向上プロジェクト2021秋

「対人援助のプロから学ぶコミュニケーション・ファシリテーション・課題解決のスキル」

期 間：2021/10/4～2022/1/24

履修者数：19名

担当教員：柴田 雅美

福祉的視点をもった ビジネスパーソンを目指そう

コミュニケーションスキル、ファシリテーション、課題解決という言葉は、学生らは授業やゼミでなじみのあるものでしょう。将来働く会社でも必要なスキルとして身につけたいものです。このようなスキルを、経済学部やデータサイエンス学部の学生に馴染みの少ない福祉職の方から学ぶことが、この授業の面白いところです。授業を通じて、これらのスキル習得はもちろん、福祉への視野を広めてもらうことが大きなねらいなのです。

授業では、湖東地域障害者自立支援協議会さんから福祉の専門職の方に毎回講師として来学していただき、伝えるスキル、ファシリテーションスキル、課題解決スキルなどを学びました。例えば、聞くスキル・伝えるスキルとして、インテーク→アセスメント→プランニング→実行→モニタリング→評価というプロセスを学びました。これは、ビジネスなどでよく使われるPDCAのプロセスと非常に似たものです。使用する言葉は異なっても、スキルとしてはビジネスと福祉のボーダーはないのだということを理解できるものでした。

授業のまとめとして、ステラ・ヤングさんが感動ボルノについて語る動画や相模原の障害者施設殺傷事件を取り上げ、障害の捉え方と幸福追求をテーマに考え、議論しました。



来季に向けて

授業全体を通じて、聞いて、伝えるスキルの大事さに改めて気づかれます。特に、ただぼんやりと聞くのではなく、目的をもって聞く。相手の人はどんな人か、どんな気分か、何を望んでいるか。そして、それをもとに考える。想像する。類推する。仮説を立てる。次に、その仮説をもとにアクションを起こす。相手に返事をしたり、他の人に伝えたり、提案する。そしてまた聞く。このプロセスを繰り返すことで、相互に理解も深まり、人間関係も構築されていく。目的を意識し、興味や関心を持って、聞いて、伝えることはスキルとして高めていけるものです。学生のスキル向上として、これから取り組んでいきたいと考えています。



よのなか探求プロジェクト2021年秋

「私たちと政治の関わりを考える」－議員への取材とワークショップの実践を通じて

期 間：2021/10/12～2022/1/25

履修者数：8名

担当教員：柴田 雅美

政治に期待するものは 何かを考えた

彦根市議会と本学の連携協定にもとづき、2021年秋学期の授業として実施しました。この授業の目的は、若者の低い投票率や政治離れが言われるなか、いちばん身近な政治家である市議会議員と関わりインタビュー記事を作成したり、対話することを通じて、地域や政治に対しての当事者感を育てたり、社会の中の私の存在を考えてもらうこととしました。履修者は8名です。

授業では、市議会についての講義、市議会議員を囲んでの座談会、インタビューと紹介記事の作成、市民とともに語るカタリパワークショップを行いました。まず講義では市議会の役割や具体的な業務を学んだ後、市議会議員3名を迎えてざっくばらんな座談会を開催しました。学生らは初めて出会う政治家に戸惑いながらも、なぜ政治家を志したのか、これから彦根をどんなまちにしたいのか、などの視点でお話を伺うことができました。

次にインタビュー記事の作成に取り掛かりました。作成した記事が議員さんの選挙公報的なものではなく、学生が自分で聞き取り、感じたものを読んでもらえるメッセージ性のあるものに仕上げるのが目標でした。

地域連携教育推進室が行うプロジェクト科目のねらいの一つに「聞く力」「考える力」「伝える力」の向上があります。今回のインタビュー記事作成でもそのトレーニングを意図しました。インタビューして得たたくさんの情報を組み合わせ、加工し、 unnecessaryなものを削ぎ落とす。読み手のことを考えて、伝わるように編集し、デザインすることが学生に課されました。完成した記事は昨年度に作成したものに加え、全議員分が完成したことから、彦根市議会や本学・地域連携教育推進室のホームページなどで公開を予定しています。

プログラムの後半は「カタリパワークショップ」です。これは彦根市議会が議会報告会として実施しているもので、今回は、市民、特に、子どもたちも参加できそうなタイトル「勇気を持って聞いてみよう。議員や市議会のあんなこと、こんなこと」と題して開催しました。学生らは全体の司会進行とグループディスカッションのファシリテーターを担いました。参加した市民が語る熱い思いや小学生が環境問題について問いかける姿を間近で見て、その熱量に驚かされた、ワークショップを終えた学生が語ってくれました。

今回の全プログラムを通じた振り返りでは、政治家とはどんな存在なのかについて自分の意見を持つことができた、これからの政治との関わり方について考察したりと、地方自治、政治家と学生たちの距離は確実に縮めることができたようでした。



来季に向けて

新型コロナウイルスの感染懸念があるなか、全てのプログラムを対面で実施しました。学生たちの学びを考えるなら、オンラインではなく実際に会い、語ることの与える影響は非常に大きいものでした。彦根市議会と大学の連携を活かした今回の取り組みを、今後は地域の未来を考え提案していく政策立案をするようなプロジェクトとして育てていきたいです。



企業連携プロジェクト2021秋
「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」

期 間：2021/10/7～2022/1/20
履修者数：14名
担当教員：柴田 雅美

大学生が知恵絞る 最優秀賞は!?

本学では、平和堂・キンビール・ブリヂストン（以下、HKBとする）との連携協定に基づき、産学連携プログラムとしてプロジェクト科目・企業連携プロジェクト2021秋「高校生の地域活性化アイデアをカタチに」を実施し、データサイエンス学部・経済学部の学生ら14名が履修しています。

これは、HKBが主催する「彦根の熱き高校生の街おこしの夢を応援！熱き高校生の地域活動支援」により市内高校生が考えたアイデアの具現化を行うもので、HKBの各企業人からSDGsの取組みやプロジェクトの進め方、発想法の実践、ネーミングやコピー作りのレクチャーなどの実践的な思考やスキルを学びながら、今年の10月から約4ヶ月にわたり取り組みました。

今回の高校生企画の募集では、SDGsの考えをもとに、彦根市における「社会課題の解決」「資産を活用する観光・発展」「滋賀の長寿をより元気にする健康・スポーツ・文化振興」のテーマで75のアイデアの応募があり、HKBによる選抜で次の3つの企画が選ばれ、11月27日（土）にビバシティ彦根にて表彰式が開催されました。

今回の表彰式では、企画した高校生らが見つめるなか、大学生の取り組みの中間報告プレゼンテーションも行われました。

①「リサイクル商品のブランド化」に取り組むグループは、ペットボトルとボトルキャップのユニークな回収ボックスとロゴデザインの提案を行いました。

②「エクササイズ in ヒコネキャッスル」に取り組むグループは、エクササイズを一過性のイベントではなく将来にわたり持続可能なものにするために大学のキャンパスや生協とのコラボの提案を行いました。

③「インスタ映えまとめマップ」に取り組むグループは、紙のマップに拘らないデジタルなマップや情報発信の提案を行いました。

中間の発表の後、各グループは提案内容をブラッシュアップし、1月20日の最終成果報告会・審査会にむけ、事業計画と予算を盛り込んだ提案とプロトタイプ制作に取り組みました。

授業の最終として、成果報告・審査会を令和4年1月20日に、本学彦根キャンパスにて開催しました。エクササイズ in ヒコネキャッスル（彦根翔西館高校）、インスタ映えまとめマップ（近江高校）、リサイクル商品のブランド化（彦根工業高校）のプロジェクトごとに大学生チームが発表を行いました。

「エクササイズ in ヒコネキャッスル」に取り組んだチームでは、まずは実際に彦根城に登城し調査を実施。彦根城の登城が高齢者にとってハードであること、エクササイズの仕組みを継続的なものにするには、その担い手の確保などの難しさもあつたと分かり、エクササイズプロジェクトの継続性を考え、活用できる資源のある滋賀大学に着目し、食堂やカフェがある大学校内は、散策に加え、エクササイズの目的になり得るのではないかと仮説を立て、大学近隣の高齢者施設で滋賀大学の認知度や大学施設の利用希望の有無などの調査を行いました。調査結果から食堂やカフェの利用ニーズがあることが分かり、大学生協と交渉を重ね、地域の方が利用可能な時間帯や料金を定めることを条件に地域の方の利用可能性が聞けました。プロジェクトを「エクササイズ in 滋賀大学」として令和4年度の春学期からの試行案を発表しました。



「インスタ映えまとめマップ」に取り組んだチームは、高校生からのまとめマップをベースに、インスタというデジタルとマップというアナログをどう組み合わせるかを模索した結果、思い出フォトブックの制作を提案しました。特にコンテンツを工夫し、好きなスポットや紹介したいスポットを掲載するのではなく、好きであつたり、紹介したいと思う気持ちの根本にある想いを紹介し、共感の得やすい工夫しました。担当学生らは、実際に街へ出て撮影とインタビュー、記事作成を行い、フォトブックのプロトタイプが完成しました。実際のフォトブックでは、彦根市内の幅広い世代の協力を得て、10スポット・30ページ程度のものを狙っていますと意気込みを語りました。



「リサイクル商品のブランド化」を担当したチームでは、HRP（Hikone Recycle Project）の名称とそのブランドロゴをペットボトルキャップで作成したオブジェとひこにゃん型のペットボトルキャップ回収ボックスを提案しました。プロジェクト当初は、プラスチックを再加工した商品企画を検討しましたが、コストが大きく断念せざるを得なかったことから、彦根におけるプラスチック問題を再検討する中で、観光地でのペットボトルやキャップ回収に課題があることに着目し、回収を啓発するロゴデザインとキャップ回収ボックスの提案になりました。発表会では、彦根市社会福祉協議会から提供を受けたペットボトルキャップを使い、オリジナルロゴのオブジェも披露しました。



この報告・審査会には彦根市とHKBの3者の出席を得て、それぞれ取り組みに対し、コメントをいただきました。その後、各社での審査の結果、最優秀賞にインスタ映えまとめマップに取り組んだ「彦根思い出フォトブック」が選ばれました。



「彦根思い出フォトブック」は、2月から担当学生とHKBで打ち合わせを重ね、6月に完成・発行に向けて動き出しました。

来季に向けて

コロナ禍で学生同士の交流が減るなかで、ディスカッションや交流を希望する声が多いです。HKB企業連携プロジェクトの2年目としても、感染対策には工夫をしつつ、学生同士・学生と企業との交流ができる授業プログラムにしたいと考えています。



3. プロジェクト科目

不登校プロジェクト2021春・秋
春 多様な学びのあり方を学び、居場所づくりを考えよう
秋 教育の多様性を学び、議論しよう

期 間：春2021/4/16～7/23 秋2021/10/8～2022/1/21
履修者数：春14名・秋10名
担当教員：柴田 雅美

不登校と 多様な学びの今を学ぶ

びわ湖東北部地域連携協議会事業の一環として、2021年春・秋学期にそれぞれ不登校プロジェクトとして授業プログラムを開講しました。このプロジェクトは不登校や隠れ不登校の増加がひとつの社会問題とも言われ、それに伴い公教育の在り方や公教育以外の選択肢としてフリースクールやオルタナティブスクールも注目されてきていることから、学生が自身の経験をベースに現代の社会課題を考えるきっかけになることを期待しました。

授業では彦根市でフリースクール「てだのふあ」を運営する山下吉和さん、本学教育学部卒業生でフリースクール「Since」を運営する麻生知宏さん、生鷹幹太さん、門脇真斗さん、愛知県でデモクラティックスクール「まんじえ」を運営する今井恭子さんを招き、リアルな現場の様子、子どもたちの姿や彼らの進路、これから必要な教育のあり方などを学び、学生から率直な疑問や質問をしたり、意見を交わしたりしました。

授業を通して様々な子どもたちがいることを知り、また彼らにとって居心地のよい場所を作り出そうとしている大人の姿を間近で見せていただくことができました。果たして学生たちはどう映り、何を考えたのでしょうか。

授業ではゲストからの学びだけではなく積極的に議論もしました。例えば「教育って誰のためのもの」「学生は社会人か」「寄り道や道草は必要か」「居場所ってどんな所」などの正解のない問いを投げかけ学生と教員がともに議論をして考えを深めました。例えば、「寄り道」を話題にした授業では、将来に向かって進んでいく道があって、その幅を広げるために寄り道が必要だとか。寄り道も含めて大きな道を歩いているといった意見や、今やるべきことに押し潰されそうだから寄り道ができないとか、いろいろな回答がありました。

この不登校プロジェクトでは大学内で実際に居場所を開設していくことも想定していましたが、新型コロナウイルスの影響や未知の大学という場所へのハードルは高く、利用希望者がなかったことから今年度は居場所の開設には至りませんでした。しかしながら、不登校プロジェクトの一環として地域の居場所情報を掲載した「ひこねの居場所」ウェブサイトは、長浜市の居場所運営者さんとの連携で長浜・米原地域の情報も掲載したウェブサイトとしてバージョンアップできましたし、居場所情報の冊子版の発行にも協力することができたことは、今後につながる成果です。

来季に向けて

不登校プロジェクトの授業を通じて、多様な学びの必要性を理解できる学生が増えてきました。また、居場所のウェブサイトでは、支援者側の情報発信や収集に役立つことに加えて、居場所を求める人からサイトが役に立ったとの声も聞くことが増えてきました。居場所運営者からは、不登校やフリースクールなどの多様な学びの場所同士をつなぐハブとして大学が活動を展開してほしいとの声もあります。これからも必要とする多くの期待に応えられるような取り組みをしたいと考えています。

ひこねの居場所 HP



ひこねの居場所

<https://fukugan21.wixsite.com/hikoneibasho>



認知症プロジェクト2021秋 － 認知症をめぐる共生社会構築のためのプロジェクト

期 間：2021/10/4～2022/1/24
履修者数：11名
担当教員：中野 桂

若者×認知症

今年度のプロジェクト科目は11名の学生が履修し、①VR映像を使った回想法、②バーチャル・バスツアーによるリクレーション、そして③若者の向けの認知症啓発パンフレットの作成・配布の3つのプロジェクトに取り組みました。

VR映像をつかった取り組みでは、長浜市曳山博物館・長浜鉄道文化館を取材し、曳山は蒸気機関車などをVR映像としてアーカイブし、その映像を通所介護施設の利用者さんにご覧いただいて思い出などを語りあう回想法の実践を行いました。懐かしい蒸気機関車の映像などから昔話に花が咲きました。同様に、バーチャル・バスツアーでは、映像などを用いて彦根城などを見て回る旅行プログラムを作成し、それらの映像をつかって通所介護施設の利用者さんにバーチャルな「旅行体験」していただきました。認知症啓発パンフレット作成チームは、介護技術の一つであるユマニチュードを学び、それを紹介するパンフレットを作成して、認知症への理解を広めました。これらのプロジェクトでは、米原市の社会福祉法人「ひだまり」に大変お世話になりました。

このプロジェクト科目は、認知症患者さんだけでなく、介護者やご家族の方々のQOLを向上させることにありますが、まずは若者を含め、多くの方が認知症について知ることがそのベースとなると考えています。現時点では介護施設の職員の方々にアドバイスをいただいたり、お手伝いをしていただいたりして、かえってご負担を増やしてしまっていますが、この授業を通じて学生は認知症への理解を深めたものと確信しています。

認知症患者数は数年後には750万人にも達するといわれています。「ヤングケアラー問題」や「ダブルケアラー問題」などは若者にとっても身近になりつつあります。大学において認知症についての教育プログラムを提供することの意義は、今後一層高まると思われます。

来季に向けて

今年は、通所介護施設に伺ってプロジェクトを実施したことによって、取り組みの質は向上しました。新型コロナウイルス感染症の流行状況にもよりますが、来年度も可能であれば同様の形で継続し、「認知症とともに生きる共生社会」の構築を図っていきたいと考えています。



イベント 4

サステナウィーク2021 2021年11月22日～30日（6日間）

本学地域連携教育推進室が事務局になり、大学生と教職員による実行委員会主催のサステナウィークを開催しました。

サステナウィークとは、SDGsをはじめ持続可能な社会に向けて、さまざまなモノやコトについて、「〇〇の持続可能性」を考えてみる企画を1週間にわたり提供するイベントです。

コロナ禍の影響でソーシャルディスタンスの確保やオンライン授業やテレワークが進み、人々が個であることを求められた時代にあって、今年のテーマを「個からCoの社会へ Coを学ぶ7日間」とし、Co=繋がりがや共同の大事さを改めて認識することをねらいとしました。彦根キャンパスでの対面形式やオンライン形式が混ざっての開催で、講演会・ワークショップ・体験・上映・展示といった20もの企画がありました。



講演会



まちのコイン

面白法人カヤックが考えるこれからのまちづくり

コミュニティ通貨アプリ まちのコイン。地域の店舗や施設の個性あふれる「体験」を循環させ、地元のよさを再確認していく仕組みを提案する面白法人カヤック代表の柳澤氏から、理念と実践を伺いました。

株式会社カヤック
代表 柳澤大輔さん



個からCoの社会へ



キーワードは「ともに」。 地域コミュニティ活性化と新しい働き方



地域を元気にしたり、地域で働いたりする新しい形、協同労働。みんなのやってみるを叶える仕組みを、ワーカーズコープで活性化する地域コミュニティをテーマに学びました。



ワーカーズコープ・センター事業団
京滋事業本部 本部長 田中紀代子さん



フリーランスの生き方新しい働き方を考えよう

近年、働き方の一つとして認識されているフリーランスという働き方。フリーランスのデザイナーとして、また滋賀大学の講師でもある中塚 智子先生から、フリーランスで働くことの魅力や悩みなどを伺い、参加者自身のキャリアを考える時間となりました。



aima works、滋賀大学非常勤講師
中塚 智子さん



国際連合世界食糧計画WFP

世界最大の人道支援機関である国連WFPから、グローバル規模で人道的SDGs目標を実現しようとする活動の実態（紛争等困難に直面しながらもリスク管理をしつつ活動を進める）やその活動意義を学びました。今後更に広い範囲でSDGsに関わる可能性のある大学生らが多角的SDGs活動視点を形成する機会になりました。



国連WFP日本事務所政府連携担当官副所長 下村理恵氏
認定NPO法人国連WFP協会 理事・事務局長 鈴木邦夫氏



びわこコンドームに込めた想い

コンドームと聞いて、恥ずかしいと感じる人は少なくないと思います。「性」の種類は人の数だけあり、すべての人間が当事者です。自分らしく生きるには、他人との関わり合いの中で生きるには、...。そんな自分を見つめ直す場として、「性」を考えて欲しいです。「びわこコンドーム」の発案者である元滋賀県立高校教諭の清水美香さんをお招きし、高校生対象の「びわこコンドーム」に込めた思いや、性を取り巻く自他の向き合い方、大学生として今後考えていきたい「性」をオープンに語りました。

清水 美香さん
滋賀大生 中村亮太



WS



ビルトーク

カップルがもし避妊に失敗したら...そんな時も正しくアフターピルを使えば安全を確保できる。けれども現在日本では産婦人科を受診しないと手に入らない。それに副作用を被るのは女性の方だけ。このアンバランスさ、どう対処すればいいのだろうか？そもそもピルの知識、パートナーとの向き合い方、ちゃんと考えられているだろうか？ゲストに産婦人科医の渡邊さん、ユニットのUhhwee!!を招き、カジュアルに、だけどマジメに学び、男女関係考えた時間でした。



丸山産婦人科医・産科 渡邊さん
Uhhwee!! みかさん・まゆこさん
滋賀大生 加藤 晴



Coを学ぶ7日間

カップルのニラミ



カップルのニラミvs環境問題～激論！

君の手でびわ湖の未来を拾え～

子どもを対象に環境啓発活動を行う学生団体マスターネイチャーが独自製作した紙芝居「カップルのニラミ」を基に、びわ湖の環境保全について皆で考えよう。びわ湖の豊かな自然や生き物を守るために！紙芝居の実演と環境問題ワークショップを行いました。
マスターネイチャー：渡邊 太陽 平下 怜良



音でつながる 音楽療法ワークショップ

誰でも音を出せる簡単な楽器を使って自己紹介をしたり、おしゃべりをしました。非日常感の中で、自己の内観と他者との共鳴を実感したプログラムでした。。

NPO法人音楽療法ゆる〜り認定音楽療法士
井上 かおりさん



4. イベント

上映

マイクロボラスチックストーリー ～ぼくらが作る2050年～オンライン上映会

ニューヨークの子どもたちが世界的に大きなプラスチック汚染問題を学び、彼らの視点でこの問題の根幹が何かを問いただし、解決に向かって自分たちのコミュニティからアクションを広げて行くまでの長編ドキュメンタリー映画を鑑賞しました。僕たちは今から何をするか、一緒に考える時間になりました。



フードロスを考える ～もったいないキッチン上映会&映画出演者 塚本ニキさんと座談会～

「世界で生産される食料の3分の1は食べられることなく廃棄される」と言われている。映画「もったいないキッチン」は、年間643万トンの食料が廃棄されている世界トップクラスの食品ロス国「日本」を舞台に、もったいない精神で食品ロスの現実と向き合ったドキュメンタリー映画である。映画鑑賞の後、日本人出演者である塚本ニキさんをZoomでゲストスピーカーに招いての座談会も企画しました。



映画出演者
キニマンス 塚本ニキ

ものづくりの変化を五感で楽しむ企画展 「手で考え、足で感じる」

ものづくりと環境学習が、どのように学習者の五感と思考の刺激へつながるかについて研究をしている教育学部 岳野公人教授の取り組みです。台風や風雪の被害を受けた倒木や流木を材料に製作された椅子などを展示し、その製作過程を紹介しました。皆様の五感を刺激し、実際にものづくりをしている雰囲気を感じていただけたのではないのでしょうか。



展示

フリーピアノ

カフェ・ラグーナに誰でも自由に弾けるキーボードを置きました。仲間と一緒に、一人でこっそり、弾く姿がありました。



SDGsブックフェア

SDGs初心者も、さらに学びたい人にも、SDGsや持続可能性に関連した書籍を取り揃えました。



サステナマルシェ秋

七輪カフェ 規格外の食品や野菜を焼いて食べてみよう

規格外野菜やお揚げを七輪で食べました。じわじわ時間をかけて焼いていきました。規格外で流通に乗らない野菜ですが、ホクホクとして美味しかったです。食べるだけではなく、野菜に火が通るまでの間、皆様が七輪を囲ってのんびりとした時間も楽しいひとときでした。



サステナクローゼット

廃棄されている多くの衣類の存在を知らせ、学生間で衣類を再利用できる譲渡会を開催しました。回収し残った衣類は販売し、その収益を社会福祉団体へ寄付をしました。



未来のスーパーフード、クリケット！！！！

昆虫食の可能性！温室効果ガスや水や飼料の消費が少ないとされています。牛肉などの家畜から昆虫に代わることは、よりサステナブルな社会につながるのでは。昆虫食の食べ比べ・昆虫食クイズなどを実施しました。



もったいないパントリー

「食品ロスを減らそう。必要ならに届けよう」の理念で、規格外の食べ物や災害備蓄品などの食料を配布しました。



廃油でアロマキャンドルと コーヒー残滓の芳香剤

天ぷらなどの後に残る「廃油」やコーヒーをドリップした後に残る「残滓(カス)」…そのまま排水として流すと水質を汚濁し、捨ててしまうと廃棄物を増やしてしまいます。ちょっとした工夫と活用で素敵なオリジナルキャンドルに変身しました「LCA(ライフ・サイクル・アセスメント)」の考え方を体験していただけたのではないのでしょうか。



コンドマスター養成講座 ～習うより触って慣れようコンドーム～

「コンドーム」と聞いて何を感ずますか？ 間接的にしか語られてこなかったコンドームについて、実際に手に取って、オープンな場で体験してもらいました。



People's Pantry・みんなの食品庫

フリーフードで学生を応援 食品ロス削減の啓発にも

令和3年度もフードパントリーを常設し、学生らに食料配布を行いました。「食品のロスを減らそう、必要な人に届けよう」という目的に、地域連携教育推進室のスタッフと滋賀大学サステナビリティ研究会の学生らが運営を担っています。

地域のフードバンク彦根の活動に教員や学生らがボランティアとして参加し、定期的に食品庫で配布する食材の供給も受けるなど、活動が安定し、地域と大学との関係も深まってきています。これらの取り組みが評価され、令和3年度の滋賀県食品ロス削減優良取組表彰を受賞することができました。

大学や大学生の社会貢献という立ち位置ではなく、地域社会のなかの大学として、大学生は一人の地域人として、その役割を果たしていけるよう、これからもさらなる活動を目指しています。



食品提供（寄付）25回
食品 品目数38 種・1235品
利用者数 延606回
令和3年4月1日（木）～令和4年2月末時点（継続中）

来季に向けて

この取り組みは学生が地域連携教育推進室にくるきかけになるものであるし、地域との一つの接点にもなっています。より充実させて継続したいです。



People's Pantry
もったいないをありがとうに

5

学生の自主活動

地域の企業や団体、ボランティア活動には、大学だけでは得ることができない社会課題との遭遇や人間関係への気づきなど貴重な学びの機会があります。

地域連携教育推進室は、これらの経験と大学での学びが織り交ざり、学生自身はもとより、地域や大学にたくさんの創発が生まれることを期待しています。

PICK UP !

Fridays For Future Shiga



中学生から大学生が環境問題や気候変動などの課題解決を目指して取り組む団体です。主に街頭での啓発活動やゴミ拾い活動、知事や議員さんらと意見交換を重ねたり、滋賀県が主催する環境に関する企画を考え、実施しています。

お国自慢プロジェクト彦根



コロナ禍で自由な訪日ができないなか、日本の情報に触れたいという日系カナダ人コミュニティ向けのイベント「日本全国・お国自慢オンライン」で、彦根の伝統工芸体験を紹介しました。

滋賀大学サステナビリティ研究会



滋賀大学の公式サークルではなく、滋賀大学地域連携教育推進室に集う有志の仲間たちで運営しています。現在では、食に関する活動を行っており、フードバンクひこねへの参加を行っています。

マスターネイチャー



子どもたちに環境問題への関心を持ってもらうことを目的に結成した学生活動です。オリジナル紙芝居「カッパのニラミ」を作成して、啓発活動やゴミ拾い活動を実施しています。

学生の取組

新聞掲載

2021

地域活動のリーダーを担う大学生
活動範囲拡大を遂げる

学生と地域で作るフードパントリー

学生、彦根の投票率向上に取り組む

子どもたちへ伝えたい
びわ湖のこと

データサイエンスや経済学部で農業実践
手を動かす、頭を使って

自分たちの声を聞いてほしい

着ないけど、捨てたくない
そんな気持ちからでも
環境大をスリッパで

企業の地球の環境維持活動を
取りまとめる

国政選挙を前に 声を

日系カナダ人コミュニティへ
彦根のお国自慢を学生が提案

高校生と大学生のプロジェクトで
彦根の街おこしのきっかけに

子どもに合った居場所を、地域横断的に
見つけられるホームページができました

6 協力企業・団体の皆様

2021年度も多数の企業・団体の皆様にご協力をいただき、ありがとうございました。

おかげをもちまして、地域課題をテーマにした授業の実施や学生の地域活動やボランティア活動の貴重な機会になりましたこと、お礼申し上げます。このトピックでは、ご協力いただきました取り組みの一部を紹介しています。

滋賀大学は、地域のなかの大学として地域社会の一端を担えますよう、大学・学生とともに取り組んでまいります。

引き続きのご支援とご協力をお願いいたします。

平和堂・キリンビール・ブリヂストン NPO法人ひこね文化デザインフォーラム

HKB（H＝平和堂、K＝キリン、B＝ブリヂストン）とNPO法人による「彦根発！笑顔いっぱいプロジェクト」の一環で、高校生の夢を実現する企画をプロジェクト科目として実施しました。



株式会社ベースワン 佐藤工業株式会社 株式会社浅小井農園

農業xIoTプロジェクトで、実験農場への支援、農業への助言指導をしていただきました。



彦根商工会議所・青年部

夏休みのプロジェクト型インターンシップの受入企業として学生指導、マッチング会、成果報告会の開催で、2018年度から連携しています。2021年度は企業のSDGs宣言の作成にチャレンジしました。



滋賀県湖東地域障害者自立支援協議会

福祉について大学生に身近なものとして捉え、考えてもらう機会としてプロジェクト科目のゲスト講師として登壇していただいています。2019年度から連携しています。



滋賀県湖東健康福祉事務所

滋賀県の行う生活困窮世帯の子どもの学習・生活上支援事業に大学生がボランティアとして参加し、学習支援を行っています。



彦根市子育て支援課

ひとり親家庭の子ども支援活動・プライトクラスに大学生がボランティアとして参加し、学習支援や交流や対話のサポーターとして活動しています。



彦根市議会事務局

2017年度の経済学部との連携協定締結から、学生による市議会への提案機会と学生とのディスカッションなどプロジェクト科目のプログラムを提供していただいています。



彦根市子ども若者会議

不登校プロジェクトのひこねの居場所事業では、会議のメンバーとして情報交換をしています。



彦根市選挙管理委員会・彦根市明るい選挙推進協議会

大学生有志が選挙出前講座の企画をしたり、選挙啓発のグッズを作成したりさせていただきました。



（社福）ひだまり・彦根市福祉保健部・NPO法人びわ

認知症プロジェクトで学生の活動機会の提供や講座の実施、授業への助言をしていただきました。



フードバンクひこね フードパントリーひこね

大学生がボランティアとして定例の食料配布活動に参加したり、大学のPeople's Pantry・みんなの食品庫への食料提供をいただいています。



（株）棚橋食品・吉原農園（やさいやさん）

サステナブルシェアのもったいないバントリーなどで、流通しない食品や規格外野菜の提供をしていただきました。



ブレイバック劇団 ウィズ

プロジェクト科目のゲストとして、即興劇を通じて「聞く、考える、伝える」の実践練習をしていただきました。



彦根市社会福祉協議会・ボランティアセンター

大学生が地域で活動する際、活動機会を提供していただいたり、地域住民とのかけはしになってくださいました。



ボランティアグループ「Hot Hotーほどほど」

コロナでアルバイトができないなど収入の減った学生も多い中で、無料でお弁当の配布をしていただきました。



デモクラティックスクールまんじゅ フリースクールてだのふあ・フリースクールSince

不登校プロジェクトの授業では、多様な教育現場として活動を紹介していただき、子どもたちの実情を学びました。



かめのこども食堂

子どもたちへの食堂運営にボランティアとして学生を受入れたいたり、コロナ禍での孤立しがちだった学生にとって、人と関われる場所を提供していただきました。



cotton〜こっどん〜

不登校ひこねサポートブックの制作で連携したり、「ひこねと湖北の居場所」ホームページの充実にご協力をしていただきました。





地域連携教育推進委員：竹中 厚雄 / 柴田 雅美 / 菊地 利奈 / 佐野 洋史 / 田村 あずみ / 入江 直樹 / 土田 梨絵（事務担当）

国立大学法人 滋賀大学 経済学部 地域連携教育推進室

2021年度 活動報告書 令和4年3月31日発行

発行 滋賀大学経済学部 地域連携教育推進室

お問合せ：地域連携教育推進室 〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1 Tel.0749-27-1348

地域連携教育推進室
LINE QRコード ↓



地域連携教育推進室
HP QRコード ↓

